

いまだキッ! 大学生

皆さんからの情報や感想を待っています
〒460-8511(住所不要) 中日新聞 教育報道部
☒ youth@chunichi.co.jp

名古屋学芸大栄養学科の学生

東日本大震災で被災した宮城県石巻市萩浜の仮設住宅で、名古屋学芸大(愛知県日進市)の学生が住民向けの無償の食事を2年前から春休みと夏休みの間に開いている。独居の住民やお年寄りが多く、学生による栄養満点の食事が喜ばれている。(藤原啓嗣)

被災地和ます出張食堂

本震災
東大
5年

住宅の一室に住民が次々にや

て来た。こじんはんと
玄間にかけてのれんをくぐ

学生は仮設住宅の四層半二
間の空き部屋一室を借りて食
堂を開設。1人が並んで食
ブルといすを置き、住民が気
兼ねなく食事ができるように
している。大学が食材と活
生の片道分交通費を出し、学
動をする。

専立はサネホワレンソウ
の卵炒めやハ宝菜など多彩
だ。健康に関心を持ってもら

盛んな土地で50世帯が暮ら
していた。津波で多数の家が
流され、2人が亡くなった。
多くの住民が仮設住宅に移住
し、今も1世帯30人が暮ら
す。十七代以上のお年寄りが
多く、四人が一人暮らしだ。
三月下旬まで朝晩の気温が
氷点下になる日も多い。学生
が用意した朝食のみそ汁で体
を温め、カキの養殖の仕事に
向かう住民も多い。

住民の無償赤間味噌作り
(左)は二人暮らしと手間
のかかる料理をしない。若い
子は話ができるのもうれし
い」と喜ぶ。

学生は食卓について借りてい
る部屋で寝袋で寝泊まり。交
流を促めるために、住民の部
屋の風呂を借りて「もうら
い」をするのもある。

宮城県漁業協同組合の役員
高橋茂樹監督さんは「津波に
のまれて、親の家の屋根は
がみついて助かった」と経験
を学生に語った。区長の江刺
みゆきさん(左)は「三年前に
一瞬に仮設住宅で暮らしてい
た夫が震災で七十八歳で亡
くなった」と話してくれた。

耳を傾けた坂井養菜さん
(右)は「震災のことは聞くが
気を取らなくていい」とい
う。ふん(右)は「お話をきい
た」と話す。リター(右)の五
十住友(左)は「こは「津波で
すべて失った人が、カキを産
し入れてくれた。思いやりの
大切を学んだ」と振り返る。

寝袋持参 もらいたい湯で交流も

り、食堂に入る顔は明るい。
学生が席に案内し、エビチリ
とナムル、スープをおおげさ
せて配膳した。味噌汁はう
かかぬに作る学生で、住民た
ちは「みんなで食事で、最
高だ」と手を拍った。

おうちメニュー表にカローリ
と塩分量を考へ、
紙紙はもともカキ養殖が

仮設住宅の住民のために
これまで約百五十食を備
供してきた名古屋学芸大の
学生たち。住民は、どんな
メニューがに残ったのだら
うかと、記者が食堂に来た
住民十八名に聞き返して聞
いたとき、名古屋めしが一
番人気だった。

「本場の味だ」名古屋めし人気



食卓を囲み、名古屋学芸大の学生と被災する仮設住宅の住民と話し、味噌汁やエビチリを配膳する学生

食堂は、管理栄養学部管理
栄養学科の田村明教授(左)が
震災後に炊飯を担ぎ、学生
が大学で学んだことを生かし
てボランティアが得意なか
と始めた。衛生管理や献立作
りを学ぶ同学科の学生が調理
に助く。

五日目の今回は、二月十七
日(三月九日)に三年生二十
人が参加する。六、七人ずつ
が交代で一週間帯び、希望
する住民の朝食と昼食、夕食
を作る。



人気メニューをこよひ提供する名古屋学芸大の学生たち

仮設住宅の住民のために
これまで約百五十食を備
供してきた名古屋学芸大の
学生たち。住民は、どんな
メニューがに残ったのだら
うかと、記者が食堂に来た
住民十八名に聞き返して聞
いたとき、名古屋めしが一
番人気だった。

一位は「養殖のみそ煮込み
もあって、二票の人は一体が
温まる」と笑顔。二位は夫
むす(右)と(左)は「赤だし
のき汁、エビチリが、黒
ずて好んだ。伏見團子も
ん(右)は「みそ汁は甘たく
さんで、だし(右)の割りがいい
」と話す。

江刺みゆきさんは「養殖したカ
キを産んでカキ養殖する
手先達をカキ養殖する
人も多からぬ味噌汁が
好まれる。珍しきもあって
名古屋めしが人気なので
は」と話した。